原　著

1970年代以降のボーデ学校について
― W.ボーデの著作等を手掛かりにして ―

菅井　京子（21世紀スポーツ文化研究所）

Über die Bode-Schule seit den 1970er Jahren
― Anhand von den Schriften W. Bodes usw. ―

SUGAI Kyoko
(Institut für Sportkultur im 21. Jahrhundert)

Zusammenfassung

Die Gymnastikbewegung, die in den 1920er Jahren anfing, erschien in den 60er Jahren ihre Aufgabe zu erfüllen und ausgereift zu sein. Aber in den 70er Jahren änderte sich der Anblick der Gymnastik. Wir können so ein Beispiel in der Medau-Schule sehen. Über die Medau-Schule und den Zustand der damaligen Gesellschaft, der die Gymnastik umringt, gibt es einige Forschung, zum Beispiel „Porträt einer Gymnastikschule" und „Über die Richtungsänderung in der Medau-Schule der 1970er Jahre" usw.. Wie war es dann in der Bode-Schule, die das sogenannte Stammhaus sein sollte, seit den 70er Jahren? Für die damalige Bode-Schule, die W. Bode als der zweite Leiter nach dem Gründer R. Bode übernahm, gibt es kaum Forschung.

Ziel der vorliegenden Arbeit ist es zu klären, was in der Bode-Schule seit den 1970er Jahren geschah. Dabei sollen die Schriften W. Bodes usw. berücksichtigt werden.

W. Bode richtete sich nach der zeitgemäßen Definition der Gymnastik, die in der Internationalen Arbeitstagung für Terminologie der Leibesübungen (des Sports) 1963 bestimmt wurde, und durch die Einordnung der Fachsprache, die Stoffgliederung und die Bewegungslehre usw. zu überprüfen, reformierte er das System der Gymnastik auf wissenschaftliche und rationale Art und Weise. Dabei wählte er den Basisstoffplan in „Deutscher Gymnastik" als Grundlage. Das könnte eine der ersten Umwälzungen seit der Gymnastikbewegung der 20er Jahre sein. In dieser Definition der Arbeitstagung erkannte er jedoch die Tendenz der Trennung zwischen Körperbildung und Bewegungsbildung. Er unterstützte diese Trennung nicht und strebte Körperbildung und Bewegungsbildung in der Gymnastik ohne Unterscheidung an. W. Bode wollte „Körperbildung und Bewegungsbildung" als einen großen Erfolg der Gymnastikbewegung, die u.a. R. Bode gefördert hatte, übernehmen. Außerdem, um eine der großartigen Charakteristika der Bode-Schule zu bewahren, stellte W. Bode K. Passon, Musiker und Rhythmiklehrer der Bode-Schule, als Schulleiter an, denn W. Bode erkannte die Verbindung von Musik und Bewegung als den größten Charakter der Gymnastik R. Bodes.

So geschah in der Bode-Schule seit den 1970er Jahren eine fundierte Ausbildung, die auf neuesten sportwissenschaftlichen Erkenntnissen beruhte und den Geist und die Tradition der Schulgründer übernahm.

はじめに

1922年の「芸術的な身体修練のための会議」[1]から大きく展開し始めた体操改革運動[2]の成果としての『ドイツ体操（1935年）』[3),4)]は、その継承・発展としての『リズム体操（1953年）』[5)]や『新しい体操――メダウの教授法（1967年）』[6)]を経て、1960年代に体操改革運動以来のリズミカルな「動きの修練」や「動きづくり」を引き継ぐ豊かな「動きの教育」に資する体操として集成されたと考えられる[7),8),9),10)]。

しかし、1970年代になると、体操はその様相を大きく変化させ、分化し、多様化していくことになった[11)]。一見混乱とも取れるようなこのような状況のなかで、体操改革運動以後初めての変革が体操に起こったという。これについては、A.ゼイボルト（Annemarie Seybold）、H.ベルネット（Hajo Bernett）、B.フレックマン（Barbara Freckmann）の言及[12),13),14)]があるが、そこでは具体的な事例は示されていない。70年代の体操を取り巻く社会の状況については、『ある体操学校のポートレート』[15)]や「1970年代のメダウの学校における方向転換について」[16)]等の研究がある。そこでは当時のメダウ学校（Medau-Schule）で起こった変化についても論じられている。それでは、体操学校の本家本元ともいうべきボーデ学校（Bode-Schule）ではどうであったのか。ボーデ学校の創設者であるR.ボーデ（Rudolf Bode, 1881-1970）の体操については、大谷武一、二宮文右衛門、万沢遼、吉田茂、稲垣正浩、板垣了平、E.ノイエンドルフ（Edmund Neuendorff）、C.ディーム（Carl Diem）、B.ザウルビーア（Bruno Saurbier）、B.フレックマン（Barbara Freckmann）の研究[17),18),19),20),21),22),23),24),25),26)]等々多くのものがあり、日本の体操界にも早い時期から紹介され大きな影響を与えてきた。しかし、1970年代になってR.ボーデの後にその学校を引き継いだW.ボーデ（Wolfgang Bode, 1924-2004）の体操についての研究はほとんど見当たらない。

本研究では、W.ボーデがボーデ学校を引き継いだ1970年代の体操を取り巻く社会の状況と照らし合わせて、W.ボーデの著作等を手掛かりにして当時のボーデの体操学校に何が起こったのかを明らかにする。1970年代のボーデ学校の体操、すなわちW.ボーデの体操は、体操改革運動の成果を継承・発展させてきたR.ボーデの体操と現代の体操との結節点であると考えられる。また、分化や多様化が進んだこの1970年代の体操の状況、特に生理学や医学等の自然科学に基づくものが優勢であるような状況は現代の体操にも共通するものであり、本研究を現代の体操を考えるための一助としたい。用いる主な資料は、「体操という概念」[27)]、「体操の専門用語」[28)]、『ルードルフ・ボーデ――その生涯と業績』[29)]、「スポーツの領域における体操体系と教材分類」[30)]、「体操における教材の新しい分類」[31)]、『動きとリズム』[32)]、『ボーデ学校100年、体操100年』[33)]等である。

Ⅰ．ボーデ学校（Bode-Schule）について

1．R.ボーデとボーデ学校について

『ルードルフ・ボーデ――その生涯と業績』[34)]と『ボーデ学校100年、体操100年』[35)]等によれば、R.ボーデが率いたボーデ学校の概要は以下のようにまとめられる。

R.ボーデとE.ボーデ（Elly Bode, 1886-1983）夫妻は、1910-1911年にドレスデン（ザクセン州の州都）近郊のヘレラウで開催されたダルクローズ（Émile Jaques-Dalcroze, 1865-1950）の講習を受け、ダルクローズが認定するリズム体操教師としての免許状を取得した。そして、その1911年にボーデ学校をミュンヘンのアグネス通りの教室とテュルケン通りの音楽堂等からなる「音楽とリズムのための研究所（Institut für Musik und Rhythmus）」として創設した。ミュンヘンには、この時期にB.メンゼンディーク（Bess Mensendieck, 1864-1957）の研究所やR.v.ラバン（Rudolf von Laban, 1879-1958）のダンス学校も前後して設立されている。また、R.ボーデが後に大きな影響を受けることになる哲学者L.

クラーゲス（Ludwig Klages, 1872-1956）と出会うのも、ミュンヘンであった。それは1912年のことであった。1913年には、ボーデ学校の最初の公開演技発表会が行われ、その会の冒頭で行われた講演が『リズム体操の課題と目標』[36] として公にされた。これによってR.ボーデは彼の思想を確立し、ダルクローズの方法論から離れ、独自の道を進むことになったといわれている。第１次世界大戦が始まり、R.ボーデは1915年にフライジング（バイエルン州の都市）に動員され、冬にはルーマニアに差し向けられた。戦争中の1915-1918年には閉鎖されていたボーデ学校も、戦後の1919年に再開することができた。1922年には『表出体操』[37] が出版された。また、この同じ年に、イェーナ（テューリンゲン州の都市）で100人を越える国内外からの参加者を集めて大きな講習会が催されたのだが、これには後にボーデ学校を支えることになるH.メダウ（Hinrich Medau, 1890-1974）やH.フルフト（Hans Frucht, 1888-1964）も参加しており、その講習会の参加者たちによってボーデ同盟（Bode-Bund）が設立された[38]。そして、R.ボーデ自身とH.フルフトの編集で、ボーデ同盟の報告書が出版された。この報告は、後（1927年）に定期刊行誌「リズム」のなかで行われるようになる。この1922年には、体操改革運動を大きく展開していく契機となった「芸術的な身体修練のための会議」[39] も開催されたのであるが、ボーデ学校も、この会議に参加し、当時最もよく知られた「身体づくりの研究所（Körperbildungsstätte）」として具体的な授業例を示した。この会議の後、R.ボーデは、多くの講習会に招聘されるようになり、その講習会には全国の学校から多くの指導者たちが参加したという[40]。

1924年に、W.ボーデは、R.とE.ボーデの第三子として生まれた。1925年には、ミュンヘンのボーデ学校と並行して、身体教育のためのベルリンボーデ学校（Bode-Schule für Körpererziehung Berlin, Ausdrucksgymnastik System Dr. Rudolf Bode）が設立された。その年の11月には、「社団法人ドイツ体操同盟（Deutscher Gymnastik-Bund e.V.）」が、F.ヒルカー（Franz Hilker, 1881-1969）[41] やB.メンゼンディーク、H.カルマイヤー（Hedwig Kallmeyer, 1884-1948）、ローエラント派（Loheland-Schule）、E.ギンドラー（Elsa Gindler, 1885-1961）、R.v.ラバン、そしてR.ボーデによって設立された[42]。1927年には、ブレーメン（ブレーメン州の州都）に、H.フルフトに率いられた寄宿舎付きのボーデ学校の支部（Zweiganstalt der Bode-Schule mit Internat）も開設された。

1933年には、「ドイツ体操同盟」と他に２つの組織[43] が、合併し、「体操とダンスの専門職協会（Berufsverband für Gymnastik und Tanz）」になった。R.ボーデがそれを率いた。さらに、その年の終わりに、それは「ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟（Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer）」に組み入れられた。この連盟で、R.ボーデは「体操とダンス」の部門（Fachschaft）を統率することになった。1935年には、R.ボーデが中心となり、この連盟の叢書の第１号として『ドイツ体操』[44] が出版された。その年の夏に、ボーデの体操を地方の人々にも広めるよう当時の帝国農政指導者R.W.ダレ（Richard Walther Darré, 1895-1953）がR.ボーデを招聘した。R.ボーデは、ボーデ学校での指導を断念し、ブラウンシュヴァイク（ニーダーザクセン州の都市）のブルグ・ノイハウスに移り、労働者のための帝国学校で専門指導者となった[45]。第２次世界大戦後、R.ボーデは、しばらくの間（1945-47年）逃亡と隠遁生活を送った。その間、E.ボーデを支えたのは、父R.ボーデと同じオーケストラの指揮者の教育を受けた第二子のL.ボーデ（Ludwig Bode,1915-1958）であったという。 その後、1951年にミュンヘンのボーデ学校は、E.ボーデによって再開された。バイエルン州の教育・文化省の決定によって、この学校は公式には「ミュンヘンのエリー・ボーデ私立体操女教師学校

（Private Gymnastiklehrerinnenschule Elly Bode in München）」とされ、3人の女生徒の養成が始められたという。

1953年に『リズム体操』が出版された。50年代半ば頃には、R.ボーデもE.ボーデも体育界や体操界から高く評価されるようになった。例えば、1955年に、R.ボーデは、国際新体操連盟（Internationale Liga für Moderne Gymnastik, 1951年発足）の名誉会員となった。また、同じ1955年に、R.ボーデは、ドイツの13の体操養成所の校長たちが提携して結成した「ドイツ体操学校長同盟（Bund Deutscher Gymnastik-Schulleiter）」の会長に選ばれた。1956年には、R.ボーデとE.ボーデは「ドイツ体育教師同盟（Bund Deutscher Leibeserzieher）」の名誉会員となった。同じ年に、ボーデ学校は、修理されたダンテ・スタディオンに引っ越しし、戦後の仮住まいを脱した。

2．W.ボーデとボーデ学校について

『ボーデ学校100年、体操100年』[46] 等によれば、W.ボーデが引き継いだボーデ学校の概要は以下のようにまとめられる。

W.ボーデは、1952年にスポーツ・体操教師になるための試験（副科目音楽）に合格し、ミュンヘンの私立のギムナジウムで働き始めた。1956年頃からW.ボーデもボーデ学校に関わるようになり、体操やダンスの講習を企画し、その指揮をとった。1963年に、彼は、体育（スポーツ）術語検討の国際会議（Internationale Arbeitstagung für Terminologie der Leibesübungen≪des Sports≫）に体操概念検討グループの一員として参加した[47]。1964年にR.ボーデは心筋梗塞を患った。1969年には、定期刊行誌「リズム」が、「体操とリズム」に改称され、その編集の仕事もR.ボーデからW.ボーデに引き継がれた。1970年、R.ボーデは90歳の誕生日を待たず死去した。ボーデ学校は、その創設者R.ボーデが亡くなった後、その妻であり共同創設者であるE.ボーデと彼らの息子であるW.ボーデによって引き継がれた。1972年に、W.ボーデの編集による『ルードルフ・ボーデ――その生涯と業績』が公にされた。

E.ボーデは、1976年に、90歳の記念講習会を実施し、すべて自身で演技し、新聞は「世界で最年長の現役体操女教師」と彼女を褒め称えたという。彼女は、変わらず学校経営に参画していたが、1982年には、W.ボーデが経営者（Geschäftsführer）に、R.とE.ボーデの教え子であったI.ベーメ（Iris Böhme）[48] が校長に、W.ボーデの義姉のI.ボーデ（Ingrid Bode）が事務局を務めることになった。そして、同時に、ボーデ学校は、公益学校有限会社（Gmeinnützige Schulgesellschaft mbH）[49] になり、州に認可された代替学校（Staatlich anerkannte Ersatzschule）[50] の法人として助成金を得るようになった。また、校舎としてはニュンフェンブルク城の近くの余暇スポーツ施設を使うようになった。1989年には、I.ベーメと、音楽家でありボーデ学校のリトミックの教師であるK.パッソン（Karlheinz Passon）がボーデ学校の共同出資者（Mit-Gesellschafter）になり、K.パッソンが校長を引き受けた。1996年にK.パッソンは、州に認可されたドイツの体操とスポーツのため職業専門学校の連邦連合会（Bundesverband der staatlich anerkannten Berufsfachschulen für Gymnastik und Sport Deutschlands）の理事になり、体操教師の職業政策にも尽力したという。

Ⅱ．1970年代の体操を取り巻く社会の状況について

1．体育（スポーツ）術語検討の国際会議の開催について

1963年10月14日から19日に、オーストリアのヴォルフガング湖畔のシュトローブルで体育（スポーツ）術語検討の国際会議があった。この会議は、体育・スポーツを学問的に整備するためだけでなく、急速に進む社会の科学・技術化や国際化に対応するためにも、体育・スポーツで用いる概念の

統一が必要であるということから開催されたという[51]。そこでなされた体操の定義が、1970年代の体操に大きな影響を与えたと考えられる。

この会議で、体操については、まず、それに特有な関心事について話し合われた。それは、「動きの空間的・時間的秩序の追求」[52] であり、スポーツの「成果の追求やそれを競うこと」[53] とは明らかに異なるということが確認された。それまで体操の定義とされてきた「身体づくりと動きづくり（Körper- und Bewegungsbildung）」については、確かにドイツ語圏では通用する正確な定義である[54] が、国際交流の盛んな時代に術語として一義的に限定しうるように翻訳されえないもので、誤解されやすいものである[55] ということも報告された。そして、最終報告で、体操は、次のように定義された。体操は、成果・記録を目指すのではなく、「身体や動き自体を問題にする身体運動」であり、「生理学的な意図において準備、補強すること、あるいは芸術的、音楽的、美的な観点から行われることである。」[56] この定義の「あるいは」の前半部分の「生理学的な意図において…」は「身体づくり」を、後半部分の「芸術的、音楽的、美的な観点から…」はリズム体操等による「動きづくり」を置き換えたものと考えられる。因みに、この報告書では、体操の定義の補足解説のところで、「体操」という言葉は「あらゆる種類の身体運動（alle Arten von Leibes-<Körper->Übungen）」という意味で用いることはできないので、狭い意味で用いることを勧めるとも述べられている。また、この報告書では、個別の体操についても定義がなされている[57] が、リズム体操は、「主に音響的要素によって動きの空間的・時間的経過に働きかけるという特徴をもった体操である」とされた。

R.ボーデの体操すなわちリズム体操は、それまで、そのリズムの運動学によって体操だけでなくあらゆるスポーツ種目にも貢献し、身体づくりとリズミカルな動きづくりを通して新しい体育を追求するものであった[58]。その意味では、この63年の会議での体操の定義、およびリズム体操の定義は、ボーデ学校の体操の射程を縮小させるものであった。

W.ボーデは、この会議の一員であったが、彼はこの会議より前に体操概念の整理検討を始めており、1961年に「体操という概念」という論文を発表している。

2．スポーツの隆盛に伴うスポーツ科学の発達について

「1970年代のメダウの学校における方向転換について」で述べたように、1972年のオリンピックミュンヘン大会を契機にドイツでも競技スポーツが盛んになり、体操よりもスポーツに人々の関心が集まるようになった[59]。西ドイツは東ドイツを意識し、国を挙げてスポーツの強化に取り組み、才能ある者を発掘し強化しようと、学校ではそれまでの体育（Leibeserziehung）から学校スポーツ（Schulsport）に舵が切られた[60]。そこでは、いろいろなスポーツ種目の総和において包括的な身体づくりが構想された。体操は選択科目として授業されるか、スポーツ種目の準備運動としてのウォーミングアップ体操や補強としてのコンディショニング体操としてしか行われなくなったという[61]。そして、この時期に、体操学校の卒業生の教職への道は、大変狭いものになった。1976年に文部科学大臣会議で国家試験によって認められた教師、すなわち体操教師ではなくスポーツ教師にのみ学校での教職が許されるということが決定された[62] のである。また、大学にも変化が起き、スポーツ科学が独立した専門分野となり、体育研究所はスポーツ科学研究所に改名され、それと同時に、研究依頼を伴う多くの求人もなされた[63]。そして、その研究成果は、スポーツ選手だけでなく一般市民の広い層に行き渡り、フィットネス・トレーニングやエアロビクス・エクササイズの大流行を引き起こした[64]。このように、この時期、スポーツ科学、特に自然科学的・生理学的なトレーニング体操の隆盛が目立つようになった。岸野も、スポーツ科学において、特に自然科学領域、なかでもスポーツ生理学やスポーツ医学が優

位な位置を占めていることを指摘している[65]。

1970年代のスポーツの隆盛に伴うスポーツ科学の目覚ましい発達という状況のなかで、W.ボーデは、体操体系の再編に取り組むことになるのである。当然、時代の要請としてこの科学的合理性は、彼の仕事に大きな影響を与えたと考えられる。

3．高等教育大綱法（Hochschulrahmengesetz, HRG）の成立について

吉川によると[66]、ドイツでは、連邦に高等教育制度の一般原則を定める大綱立法権が認められてきており、この権限に基づき連邦は1976年に高等教育大綱法（Hochschulrahmengesetz, HRG）を成立させた。これは、2006年に廃止されるまで各州の高等教育法に対する準則としての役割を果たしてきた。大綱法には高等教育機関の使命、入学許可、学修と試験、学位と修了資格の認証等に関する規定が含まれるが、それは一般的な大綱規程であり、詳細規程は各州の権限とされる。私立の高等教育機関に対しては、常に個別の設置者が必要とされる。社団法人（rechtsfähiger Verein）、民法上の財団（Stiftung bürgerlichen Rechts）、商法上の団体（handelsrechtliche Gesellschaft）すなわち有限会社（GmbH）等である。また、日本貿易振興機構によると[67]、私立の学校には補足学校（Ergänzungsschule）と代替学校（Ersatzschule）がある。私立補足学校は、主として公立学校で取り扱っていない教育内容を補足して提供しており、州に届出る義務がある。例えば、職業専門学校、外国語学校、演劇学校、通訳学校、美容師学校等である。コースの内容、教育プランの内容等は、まったく独自に設定できる。卒業資格が公式のものとして認められるためにはその補足学校が連邦によって認可される必要がある。一般的に私立補足学校に対する公的な補助はなく、そのためこの種の学校では生徒の授業料、企業あるいは他国からの援助等により完全に自弁で資金を賄う必要がある。一方、私立代替学校は、州による認可（Anerkennung）が必須で、就学義務（Schulpflicht）を満たす必要があり、公立学校を代替できる私立の学校である。卒業資格も公立学校と同じように認められる。代替学校は、州から財政補助を受けるが、その額は州により異なるという。

このようなドイツの学制の変化のなかで、W.ボーデは、1982年にボーデ学校の経営者（Geschäftsführer）になり、それと同時に学校を公益学校有限会社（Gmeinnützige Schulgesellschaft mbH）とし、州に認可された代替学校（Staatlich anerkannte Ersatzschule）の法人として助成金を得るようにした。

Ⅲ．W.ボーデによる体操体系の再編について

1．体操概念の検討について

W.ボーデは、体育（スポーツ）術語検討国際会議の体操概念検討グループの一員であったが、この会議より前の1961年に、彼は当時のドイツの体操の全体に当てはまるひとつの定義を見つけるための試み[68]として、「体操という概念」という論文を発表している。そのなかで、彼は、従来の体操概念を検討し、体操改革運動の流れのなかで、それは「身体づくりと動きづくり」に至ったと結論づけている。その際、彼が検討した概念は、おおよそ次のようなものであった。「体操は、身体をその建設的で生命力に溢れた力で育成し、発達させ、その身体を肉体的だけでなく、心的、そして精神的な価値の担い手とするような身体修練である」（Hilker, F., Reine Gymnastik, 1926）、「体操は、目的のために考え出された身体運動である」（Diem, C., Theorie der Gymnastik, 1930）、「ドイツ体操は、ドイツ人の運動感覚と運動能力を発達させる運動である」（Reichsverband deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V., Deutsche Gymnastik, 1935）、「体操の目的は、体操的な姿勢修練と動きの修練で、人格全体の発達のために、特に人間の造形的な能力の発達のために貢献することである」（Komauer, B., 1952）等々で

あった。そして、W.ボーデは、体操改革運動の成果として、また1970年代のドイツの体操の全体に当てはまるひとつの定義として「身体づくりと動きづくり」を見いだしたのである。

ところが、1963年の会議では、この「身体づくりと動きづくり」は正確な定義ではあるが、一義的に限定しうるように翻訳されえないもので、誤解されやすいものであるとして、「生理学的な意図において準備、補強すること、あるいは芸術的、音楽的、美的な観点から行われることである」と言い換えられた。

この会議でなされた体操の定義を受けて少なからず混乱した体操領域を整理するために、W.ボーデは、新たに論文[69),70),71)]を発表している。そのなかで、彼は、63年の会議の体操の定義による「身体づくり、あるいは動きづくり」という「身体づくり」と「動きづくり」の間の分断の傾向に対して、次のように述べている。「体操改革運動では、身体づくりと動きづくりが一貫して同時に求められてきたのであるが、…（中略）…今や、この２つが分割され、それぞれの極端な変種を求めるような動向がみられる。」[72)]「体操改革運動では、…（中略）…生理学的な目的に適うことと芸術的な美しさを求めることは互いに結合されるといわれてきた。」[73)] W.ボーデは、あくまで「身体づくりと動きづくり」を同時に目指す中間領域としての体操[74)]を主張した。

２．体操の専門用語と教材の整理・分類について

この「身体づくりと動きづくり」を目指して、W.ボーデは、1970年代に適した体操の教材の整理・分類に取りかかった。彼は、体操改革運動当時にまとめられた要綱『ドイツ体操』の基本教材の構想を高く評価している[75)]。それは、研究領域として示された次の５つ[76),77)]のことである。

(1) 動きの基礎修練（Grundschulung der Bewegung）
(2) 姿勢修練（Haltungsschulung）
(3) 動きの発展（Bewegungsentwicklung）
(4) 手具と動き（Bewegung und Gerät / Bewegung mit Gerät）
(5) 動きのゲシュタルトゥング（Bewegungsgestaltung）

W.ボーデは、新しい体操諸派が一致団結してつくりあげた『ドイツ体操』を非常に高く評価する一方で、「当時新しい体操諸派は、共通する言語的基盤（専門用語）をもたず」[78)]、「それ（ドイツ体操）は妥協の産物でもあった」[79)]とも述べている。リズムを重視する諸派[80)]は「はずむ」という全身運動を強調するのに対し、養護的諸派[81)]はいろいろな姿勢での基礎的作業（部分運動や手当）に価値をおいて、結局、次のようにまとめられたという[82)]。「流れるような動きは、よく保たれた姿勢からのみ生まれる。」[83)]確かに、『ドイツ体操』では、「動きづくり」に重点が置かれ、「身体づくり」はそれを支えるものという重要な位置付けになってはいる[84)]が、それに当てられた「姿勢修練」ではあまり多くの教材が示されていない[85),86)]等々の全体的なまとまりに弱点が見られる。

W.ボーデは、この『ドイツ体操』の弱点を修正するために、まず、体操で用いられてきた専門用語の整理・検討から始めた。彼は、1970年代当時用いられていた体操の名称（○○体操といわれていたもの）を集め、それを分類・整理した。体操の前に付けられた言葉は、その体操の目的、方法、特徴等を表すものとしてまとめた[87)]。その結果、彼は、純粋体操、新しい体操等の名称は具体的な意味を表していないとし、目的体操については同語反復であるとして退けた。次に、基礎的な理論に関する概念としてKörperschulung（身体修練）-Körperformung（身体形成）-Körperbildung（身体づくり）-Körpererziehung（身体教育）、そして、Bewegungsschulung（動きの修練）-Bewegungsformung（動きの形成）-Bewegungsbildung（動きづくり）

-Bewegungserziehung（動きの教育）を検討し、体操に最適な概念として「身体づくり」と「動きづくり」を選択した[88]。「身体づくり」は、人格への影響を含む身体的変化を表し、「動きづくり」も、また、動きの空間的規模と時間的経過変化と同時に動きによる人格の育成の意味をも含めた概念であるという。そして、最後に、体操の教材分類に欠かせない体操的な動きに当てた専門用語を整理した[89]。例えば、曲げる、伸ばす、上げる、下ろす、ねじる等の「基本の動き（Grundbewegung）」や歩く、はずむ、走る、はねる、跳ぶ等の「基本運動（Grundformen）」等々である。

そして、W.ボーデは、1971年の「スポーツの領域における体操体系と教材分類」や1978年の「体操における教材の新しい分類」のなかで、この体操の動きに当てた専門用語を用いて、教材の整理と分類を行い、体操の全体像を明らかにした。その際、彼は、『ドイツ体操』の構想に則り、その上で不完全なところや不足しているところを補い追加したということであった[90]。その検討の際には、時代の要請である科学的、合理的であることの他に、総観（Gesamtschau）[91]的、実際的（sachlich）[92]、論理的（logisch）[93]であることに留意したという。特に総観的であることについては、次のような彼の考え方からも窺い知ることができる。遊びや労働から生まれたスポーツの領域のなかでの体操を模索した際のものである。W.ボーデは次のように述べている[94]。

> 体操は、外界に働きかけるというよりは、自身の動きの可能性や表現に取り組むものであり、…（中略）…体操改革運動以来、身体づくりと動きづくりとの関わりで発展してきたものである。…（中略）…（従って、）一般的な行動様式の「学ぶ・戦う・ゲシュタルトする」をキーワードとして考えると、体操は、学ぶに最も関わってきたものである。…（中略）…しかし、さらに実際の体操実施者の動機を分析してみると、体操は、学ぶという教育の原理だけでなく、戦うという競技原理やゲシュタルトゥングという造形原理とも矛盾するものではないことがわかる。

そうして、W.ボーデは、体操教材の整理分類に当たり、新体操競技やダンス体操にもおよぶ広い視野をもったのである。

このようにして再編された体操教材の全体像は、項目だけ挙げると、おおよそ次のようになる[95]。

(1) 立位やいろいろな姿勢での運動や停止
(2) 関節の運動
(3) 体操の基本運動
　(a) 前進運動の基本運動（はずむ、歩く、走る、跳ぶ、はねる、転がる、転がす、這う等）
　(b) 振動運動
　(c) 捻転運動
　(d) 屈伸運動
　(e) 波の運動
　(f) 表出運動（押す、引く等）
(4) 動きを高めること
(5) 動きの組み合わせ
(6) 動きのゲシュタルトゥング
(7) 手具を用いる体操

このように、W.ボーデは、『ドイツ体操』を中心に行われてきた教材に、それまであるいは当時（1970年代に）行われていた体操教材を網羅的に取り入れ、教材体系を仕上げた。例えば、「(1) 立位やその他いろいろな姿勢での運動」と「(2) 関節の運動」を加えることによって、ドイツ体操では比較的少なかった「身体づくり」の教材を強化した。そして、「(2) 関節の運動」には、J.H.ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）の基本体操、B.メンゼンディークの機能体操、1970年代の医療体操等から、それまで部分運動といわれてあまり取り上げられてこなかった屈伸、上げ下ろしや捻転等の「基本の動き」を取り入れている。また、「(3)

体操の基本運動」では、ドイツ体操の５つの基本運動（歩く、走る、跳ぶ、振る、はずむ）に、その他の全身運動を加えた。さらに、「(4) 動きを高めること」から「(7) 手具を用いる体操」については、当時すでに盛んに行われていたジャズ体操や新体操競技から豊かな教材[96]を補充している。こうして、W.ボーデは、いわゆる「身体づくりと動きづくり」を同時に実現させようとしたのである。

３．体操の運動学について

また、W.ボーデは、体操の運動学についても検討を加えている。彼は、1972年の『ルードルフ・ボーデ――その生涯と業績』の編集に当たって、体操の運動学を次のような４つの原理にまとめている[97]。

(1) 伝導の原則を伴う全体性の原理
(2) 緊張と弛緩のリズミカルな交替の原理と運動経過の３局面論
(3) 経済性の原理とリズムの連続論
(4) 表出の原則を伴う身心の相互作用の原理

W.ボーデは、ここで、この４つの原理を彼自身の見解で説明している。もちろん、R.ボーデの著書[98]から多くを引用している。しかし、それだけではなく、他の著者のものからも引用して説明を加えている。例えば、(2) の「運動経過の３局面（構え－主動作－収め）論」のところには、循環運動の場合に収めと構えの動きに局面融合が起こるというK.マイネル（Kurt Meinel,1898-1973）の『運動学』[99]からの引用がある。さらに、(3) の「経済性の原理」のところでは、R.ボーデの見解とそれとは違う見解をP.レーティッヒ（Peter Röthig,1928-2018）の『リズムと動き』[100]から引用し、２つの見解を併記している。また、(1) の「伝導の原理」のところでは、R.ボーデの書著『体育における新しい道』や『リズム体操』に見られるような身体の中心からの伝導を、W.ボーデはあまり強調していない。これについて、W.ボーデは、「ジャズ体操の運動学について」[101]のなかで、K.マイネルによって体操の運動学は拡張されたとして、脚から胴体、腕への伝導を紹介している。この同じ論文で、W.ボーデは、R.ボーデが主張した「唯一中心（Monozentrik）からの伝導」に対して、アフリカのダンス文化の基本原則は「多中心（Polyzentrik）からの伝導」であるとも述べている。

このように、W.ボーデは、当時の新しい知見とも照らし合わせ、またジャズ体操や新体操競技の隆盛等の体操の状況をも見据えて、R.ボーデの体操の運動学を取捨選択し、まとめたと考えられる。因みに、1970年にW.ボーデはボーデ学校でジャズ体操の講習会を開催しており[102]、後にジャズ体操によるものとして、「70年代における運動学の拡張」[103]という論文も発表している。

４．体操体系の再編とボーデ学校の特徴について

このようにして、W.ボーデは、体操の専門用語と教材、および体操の運動学を検討し直し、彼の論文「スポーツの領域における体操体系と教材分類」のタイトルにも示されている通り、スポーツという言葉が最も一般的な運動概念となった1970年代[104]という時代にあった体操体系を整理した。それは、1963年の定義の「身体づくり、あるいは動きづくり」ではなく、ボーデ学校の創設者たちの意思を受け継いだ「身体づくりと動きづくり」を同時に目指すものであった。また、当時の体操を総合的に網羅したもので、そつが無く、非の打ち所が無いものでもあった。それには、W.ボーデに、長い歴史と伝統をもち体操学校の代表であるようなボーデ学校を引き継ぐ者としての自負があってのことであると思われる[105]。しかし、この体操体系は、それがオールマイティーであるだけに、ボーデ学校の特徴が表れたものとはいえないようにも思われる。

W.ボーデは、ボーデ学校の特徴を「音楽と動きの結合」に見いだしていた。それについては、『ルードルフ・ボーデ――その生涯と業績』のな

かで、彼は次のように述べている。「音楽と動きの結合は、ボーデの体操の実践的テーマの中心であった。」[106] これは、兄のL.ボーデに引き継がれるはずであった。L.ボーデは、父R.ボーデと同じようにオーケストラの指揮者としての教育を受け、第2次世界大戦の混乱のときには、母E.ボーデの学校経営を助け、ボーデ学校の後継者と目されていた。しかし、彼は早世し、W.ボーデはその欠落を当時は埋められずにいた。しかし、後に、校長となった音楽家のK.パッソンに、W.ボーデはこのテーマを託した。K.パッソンによってボーデ学校の特徴を際立たせようとしたものと思われる。

おわりに

W.ボーデは、1963年の体育（スポーツ）術語検討の国際会議による体操の定義に添って、スポーツ科学の発達した1970年代という時代に適した、すなわち科学的、合理的な体操体系を再編した。それは、『ドイツ体操』の基本教材の構想を土台にし、当時行われていた体操を総合的に集めたうえで、体操の専門用語の整理をするとともに教材の分類をし、さらに体操の運動学等を再検討することによってなされた。W.ボーデが行ったこの体操体系の再編は、体操改革運動以後初めてなされた体操の変革のひとつであったといえるであろう。しかし、1963年の検討会議の定義には、身体づくりと動きづくりの間に分断の傾向があることを、彼は見て取っていた。彼はこの分断を支持せず、体操において「身体づくりと動きづくり」を同時に求めた。W.ボーデは、R.ボーデ等が推進してきた体操改革運動の成果としての「身体づくりと動きづくり」を引き継ごうとしたのである。また、W.ボーデは、ボーデ学校の際立った特徴を維持するために、音楽家でありリトミックの教師であったK.パッソンにボーデ学校の校長を託した。というのも、W.ボーデは、音楽と動きの結合をR.ボーデの体操の最も大きな特徴であることを認めていたからであった。

こうして、1970年代以降のボーデ学校では、最新の科学的知識に基づくとともに、ボーデ学校の創設者たちの精神と伝統を受け継いだ教育が行われた。

因みに、A.ゼイボルト（Annemarie Seybold, 1920-2010）は、1976年に出版した『学校体操１』のなかで、20世紀後半の体操について、「体操を冷静に考察し、それを（1930年代の文化厭世主義や自然神秘主義的傾向から）解放した」[107] と評価し、体操に変革が起こったことについて述べている。そこには、具体的な体操指導者の名は挙げられていないが、体操学校がその変革に貢献したという一文が添えられている。W.ボーデやH.J.メダウ（Hans Jochen Medau, 1939-）、いわゆる体操学校の第二世代の指導者たちが科学的、合理的に行った体操の革新もその一翼を担ったものであったと思われる。

注および引用・参考文献

1) Tagung für künstlerische Körperschulung 5.-7. Oktober 1922 in Berlin.
2) 菅井京子、体操改革運動（Die Gymnastikbewegung）について、大阪成蹊女子短期大学研究紀要　第35号、43-56頁、1998年。
3) Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut,1935.
4) Reichsverband deutscher Turn-,Sport- und Gymnastiklehrer e.V., Deutsche Gymnastik, Wilhelm Limpert-Verlag,1935.
5) Bode, R., Rhythmische Gymnastik, Wilhelm Limpert-Verlag, 1953.
6) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., Moderne Gymnastik. Lehrweise Medau, Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt, 1967.
7) 菅井京子、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、スポーツ史研究　第24号、1-14頁、2011年。
8) 菅井京子、『ドイツ体操』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について、スポーツ史研究　第26号、1-16頁、2013年。
9) 菅井京子、体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について、びわこ成蹊スポーツ大学紀要　第３号、97-104頁、2005/2006年。
10) 菅井京子、1960年代の体操における動きのゲシュタルトゥングの意味と方法について、スポーツ史研究　第32号、1-13頁、2019年。
11) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、スポーツ史研究　第33号、48頁、2020年。
12) Seybold, A., Schulgymnastik 1, Limpert Verlag GmbH, 1976, S.9-10.
13) Bernett, H., Die Ideologie der Deutschen Gymnastik, Sportwissenschaft 8(1)., S.23., 1978.
14) Freckmann, B., Wesen und Formen der Gymnastik, Ueberhorst, H.（Hrsg.）, Geschichte der Leibesübungen Bd.3/2, Bartels und Wernitz, 1981, S.1020.
15) Erbguth, H. und Medau, H.J., Porträt einer Gymnastikschule. Entstehung und Entwicklung rhythmischer Gymnstik am Beispiel der Medau-Schule, Verlag Karl Hofmann, 1991.
16) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、前掲、43-56頁。
17) 大谷武一、新しい体操への道、目黒書店、1930年、87-91頁。
18) 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄、体育の本質と表現体操、目黒書店、1933年、64-241頁。
19) R.ボーデ著、万沢遼訳、リズム体操、ベースボール・マガジン社、1962年、10-13･102-104頁。
20) 吉田茂、体操の運動とリズム、体育の科学第21巻３号、196-197頁、1971年。
21) 稲垣正浩、新体操、岸野雄三編、最新スポーツ大辞典、大修館書店、1987年、450-451頁。
22) 板垣了平、体操論、アイオーエム、1990年、46-57頁。
23) Neuendorff, E., Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart Bd.4, Wilhelm Limpert-Verlag, 1932, S.695-708, 715, 723 und 726.
24) Diem, C., Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung, J.G.cotta'sche Buchhandlung Nachf. GmbH, 1960, S.645-648.
25) Saurbier, B., Geschichte der Leibesübungen 9.Aufl.,Wilhelm Limpert-Verlag GmbH, 1976, S.152-153.
26) Freckmann, B., a.a.O., S.1008-1013.
27) Bode, W., Der Begriff Gymnastik, Leibesübungen 12, S.3-7., 1961.11.

28) Bode, W., Fachsprache der Gymnastik, Leibeserziehung 15, S.327-334., 1966.
29) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, Festschrift des Bode-Bundes e.V., 1972.
30) Bode, W., Systematik und Stoffgliederung der Gymnastik im Rahmen des Sports, Leibeserziehung 7., S.231-237., 1971.
31) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, Gymnastik und Rhythmus, S.2-10., 1978.3.
32) Bode, W. (Hrsg.), Bewegung und Rhythmus, Verlag Karl Hofmann, 2002.
33) Bode, U. (Hrsg.), 100 Jahre Bode Schule 100 Jahre Gymnastik. Festschrift zum hundertjährigen Bestehen der Bode Schule 1911-2011, Trochos GmbH, 2011.
34) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.9-67.
35) Bode, U. (Hrsg.), a.a.O., S.8-34.
36) Bode, R., Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik, Verlag der ärztlichen Rundschau Otto Gmelin, 1913.
37) Bode, R., Ausdrucksgymnastik, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1922.
38) Bode, U. (Hrsg.), a.a.O., S.12.に、ボーデ同盟の議長はH.メダウ、書記はH.フルフト、会計はM.フェルスト（Maria Först）が務めたことも記されている。
39) 菅井京子、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、3頁。
40) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.24. に、1923年に行われたベルリンのドイツ体育大学（Deutsche Hochschule für Leibesübungen in Berlin <Diem>）とシュパンダウのプロイセン体育大学（Preußische Hochschule für Leibesübungen in Spandau <Ottendorf>）の例が挙げられている。
41) 菅井京子、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、3-8頁。
42) Bode, U. (Hrsg.), a.a.O., S.13.に、この同盟の議長をF.ヒルカーが、議長代理をボーデ学校のH.メダウが引き受けたことも記されている。
43) ebd., S.19.によると、この２つの組織とは「ボーデ体操教師の専門職協会（Berufsverband der Lehrkräfte der Bodegymnastik）」と「ドイツ身体づくり連盟（Deutsche Körperbildungsverband）」であった。
44) Reichsverband deutscher Turn-,Sport- und Gymnastiklehrer e.V., a.a.O.
45) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.25. この同じ頁には、さらに次のような記述がある。大規模な農業博覧会においてR.ボーデは彼の学生達とともに大きなデモンストレーションを行い、彼のリズミカルな体操による身体・運動教育の方法を示した。驚きとともに人々は男性グループによる激しく強い棒体操とダンス作品における男女共学主義の主張を見た。『ノイハウス体操』や60才の誕生日記念論文集『教育者としてのリズム』の写真付録はこの頃の彼の活動の一場面を伝えている。当時（R.ボーデが）「血統と土地」のドクトリンを支持していたということは、今日、体操改革運動の代表としての評価について、偏見のない判断を妨げる。しかし、ボーデは第三帝国の軍国化には明らかに同意していなかったし、しかも彼の勢力範囲内でそれを阻止しようとしたことは見落としてはならない。H.ベルネット（Hajo Bernett, 1921-1996）は、ボーデがナチスの体育指導に反対し、異議を申し立て、抵抗したということを証明する論拠について言及している。しかし当時は、状況が先鋭化する前に、戦争が勃発し、さらなる議論を無用とした。ブルグ・ノイハウスの学校はいつしか閉鎖され、教授活動も停止された。1944年までにボーデは農民労働者階級のために50

回の講習会を続けた。

46）Bode, U.（Hrsg.）, a.a.O., S.22-27.

47）Tscherne, F.（Hrsg.）, Zur Terminologie der Leibesübungen, Österreichischer Bundesverlag, 1964., S.68-69.

48）Bode, W.（Hrsg.）, 80 Jahre Bode Schule. Festschrift 1991 des Bode Bundes e.V. zum 80jährigen Bestehen der Bode Schule, Bode Bund e.V., 1991. S.3.

49）吉川裕美子、ドイツの大学・学位制度、学位と大学　第１号、167頁、2010年に、公益有限会社（gGmbH, gemeinnützige Gesellschaft mit beschränkter Haftung）という訳語がみられる。

50）日本貿易振興機構、ドイツにおけるサービス産業基礎調査、2011年に、代替学校（Ersatzschule）という訳語がみられる。

51）Tscherne, F.（Hrsg.）, a.a.O., Vorwort.

52）ebd., S.68.

53）ebd., S.64.で、スポーツは次のように定義されている。成果の追求、個人やチームの成果を競べることによって、そして、その目的のために伝統的に取り決められた、あるいは規格化されたやり方や動きによって、おおむね特徴づけられるような身体運動の形態である。遊戯的な、あるいは競技的な考え方で行われる。それぞれのスポーツ種目は、社会的あるいは複合的な観点から専門化されたそれぞれの組織によって決められた規則に従って行われる。歴史的にはイギリス起源である。

54）ebd., S.68.

55）ebd.

56）ebd., S.72.

57）ebd., S.73-76. ここでは、リズム体操（Rhythmische Gymnastik）の他に、個別の体操が次のように定義されている。

補償体操（Ausgleichsgymnastik）：偏った日常や労働の負担を軽減しようとする、あるいは既に被った身体の損傷を癒やそうとする意図をもって行われる運動。

基本体操（Grundgymnastik）：難易度の低い体操の初歩的形態。

コンディショニング体操（Konditions-gymnastik/ Trainingsgymnastik）：トレーニングプログラムの体操的な部分。

学校体操（Schulgymnastik）：特に学校の授業のために体操的運動方法の全体から選び出された形態。

芸術体操（Künstlerische Gymnastik）：基本体操、リズム体操、アクロバット、ダンス、バレエ等を基礎にして行われる体操。難易度の高い動きのゲシュタルトゥングへ通じ、いくつかの国では、競技種目として競技スポーツの意味で用いられる。

スウェーデン体操（Schwedische Gymnastik）：生理学的な運動効果の原則に基づくリングの体操。リング体操、北欧体操とも呼ばれる。

ダンス体操（Tänzerische Gymnastik）：基本体操やリズム体操の要素とダンスの形態との組み合わせのために希に用いられる表現。

58）Bode, W.（Hrsg.）, Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.26.

59）菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、前掲、48頁。

60）Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.208.

61）ebd., S.208-209.

62）ebd., S.225.

63）ebd., S.209.

64）ebd., S.209-210.

65）岸野雄三、スポーツ科学とは何か、岸野雄三・水野忠文・朝比奈一男編著、スポーツの科学的原理、大修館書店、1977年、110頁。

66）吉川裕美子、前掲、163-167頁。

67）日本貿易振興機構、前掲。

68）Bode, W., Der Begriff Gymnastik, a.a.O., S.3.

69）Bode, W., Fachsprache der Gymnastik, a.a.O.

70）Bode, W., Systematik und Stoffgliederung

der Gymnastik im Rahmen des Sports, a.a.O.

71) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O.

72) Bode, W., Systematik und Stoffgliederung der Gymnastik im Rahmen des Sports, a.a.O., S.233.

73) ebd., S.234.

74) ebd.

75) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O., S.5.で、W.ボーデは、『ドイツ体操』の基本教材の構想について、次のように述べている。「当時の構想がどれほどすばらしいものであったかは、その30年後に初めて、その一部分の拡張が行われたということから読み取ることができる。」

76) Hilker, F., a.a.O., S.18.

77) Reichsverband deutscher Turn-,Sport- und Gymnastiklehrer e.V., a.a.O., S.9.

78) Bode, W., Fachsprache der Gymnastik, a.a.O., S.327.

79) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O., S.3.

80) Geißler, A., Die Körpererziehung in der Schule zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung, Aloys Henn Verlag, 1978, S.25.では、リズム的・教育的体操として人間の活力と意志力を運動のリズムや表現力によって発達させることを重視する体操の代表者として、ダルクローズやR.ボーデが挙げられている。

81) ebd., S.22.では、衛生学的・生理学的・教育的体操として人間の身体感覚を呼び覚まし、経済的な姿勢や動きの自覚を促すことを重視する体操の代表者として、B.メンゼンディーク、H.ハーゲマン（Hedwig Hagemann）、D.メンツラー（Dora Menzler）が挙げられている。

82) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O., S.4.

83) Reichsverband deutscher Turn-,Sport- und Gymnastiklehrer e.V., a.a.O., S.16.

84) Hilker, F., a.a.O., S.23-24.

85) ebd.

86) Reichsverband deutscher Turn-,Sport- und Gymnastiklehrer e.V., a.a.O., S.15-16.

87) Bode, W., Fachsprache der Gymnastik, a.a.O. S.331.で、W.ボーデは、次のような分類を行っている。

(1) 身体部位による（足体操、胴体体操）
(2) 参加者による（子ども体操、男性の体操）
(3) 手具による（ボール体操、棍棒体操）
(4) 練習場による（床での体操、立位の体操）
(5) 行動による（呼吸体操、スキー体操）
(6) 国による（スウェーデン体操、ドイツ体操）
(7) 人物による（リングの体操、ボーデの体操）
(8) 時間の配分による（朝の体操、休憩時間の体操）
(9) 教育的に与えられた状態による（学校体操）
(10) 課題の範囲による（リズム体操、整形外科的体操）

88) ebd., S.331-332.

89) ebd., S.332-333.

90) Bode, W., Systematik und Stoffgliederung der Gymnastik im Rahmen des Sports, a.a.O., S.235.

91) ebd., S.231.

92) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O., S.9.

93) ebd., S.10.

94) Bode, W., Systematik und Stoffgliederung

der Gymnastik im Rahmen des Sports, a.a.O.,S.231-234.

95) ebd., S.235.

96) Bode, W., Die Neugliederung des Übungsstoffes in der Gymnastik, a.a.O., S.6-10. ここで、W.ボーデは、競技体操やジャズ体操から体操教材の革命ともいうべき変化が起きているとも述べている。

97) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.15.

98) Bode, R., Neue Wege in der Leibeserziehung, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1926. / Bode, R., Das Lebendige in der Leibeserziehung, C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1925. / Bode, R., Ausdrucksgymnastik, a.a.O. / Bode, R., Musik und Bewegung, Bärenreiter Verlag, 1930. / Bode, R., Rhythmische Gymnastik, a.a.O. / Bode, R., Rhythmus und Anschlag, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1933. / Bode, R., Bewegung und Gestaltung, Widukind Verlag, 1936.等である。

99) Meinel, K., Bewegungslehre, Volk und Wissen volkseigener Verlag, 1960.

100) Röthig, P., Rhythmus und Bewegung, Verlag Karl Hofmann, 1967.

101) Bode, W., Zur Bewegungslehre der Jazz-Gymnastik, Turnen und Sport 47(8)., S.172., 1973.

102) Bode, U. (Hrsg.), a.a.O., S.24.

103) Bode, W., Die Erweiterung der Bewegungslehre in den 70er Jahren, Bode,W.(Hrsg.), Bewegung und Rhythmus, a.a.O., S.54-60.

104) 岸野雄三、前掲、96頁。

105) Bode, U. (Hrsg.), a.a.O., S.22-23.にあるように、R.ボーデもE.ボーデも新体操連盟や体育教師同盟から、名誉会員の称号を贈られている。それほど、体育界や体操界から高く評価されてきた創設者たちのボーデ学校を引き継ぐということを、W.ボーデは、強く意識していたと思われる。

106) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, a.a.O., S.20.

107) Seybold, A., a.a.O., S.9-10.

(2020年4月30日受付
2020年9月18日受理)